



▲パネルディスカッションでは、地域で体験された被災状況や今後の課題について議論されました。

## 今年の台風災害を教訓に 今、私たちにできることは？

7月20日(水)、「自主防災組織・コミュニティ防災の構築を考える」をテーマに総合文化会館で「防災自治を考えるシンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、今後の自主防災の取り組みに生かすため、今年の台風災害で被災された市民の方、防災の学識経験者を迎え、基調講演、パネルディスカッションを実施しました。

まず、パネルディスカッションでの主な内容を抜粋してご紹介します。今後の皆さんの防災活動に役立ててください。

### 被災当時の様子

#### パネリスト



大保木地区連合自治会長  
神野 顕彰 氏



加茂地区連合自治会長  
上野 清七 氏



知的障害者更生施設「星の里」施設長  
菅野 仁美 氏

**神野** 大保木は現在、人口168名、世帯数104戸という地区。約70%が65歳以上で高齢化が進んでいます。災害当時、私は市外に出かけていて、携帯電話はつながらない、情報を集めようにも集まらない。市内に着いても至る所で道路の寸断、山崩れがあり、徒歩で帰りました。そんな状況の中、いろいろな方々のご協力によって今があります。一番困ったことは、連絡体制の確立、孤立住民への対処方法です。臨時に地域防災対策室を立ち上げ、神社の境内に毎朝集まって、そこで情報を寄せ合って1日の行動を始めました。

高齢化・孤立化のため、人が歩いて確認するとか、物資運搬の作業を行うマンパワー（人的資源）の確保に苦労しました。現在、それを補う方法として公民館・消防団・自治会などでの地域防災組織の立ち上げを準備しています。

**上野** 加茂地区では集落が23集落、人口は200人ぐらしか住んでいません。台風災害では森林が地すべりを起こし、国道194号が約1カ月間通れなくなりました。荒川の集落へ通じる市道は現在も通れません。また、地区の防災拠点であった消防団の詰め所が土石流で使用不能になりました。電気と電話も5日間不通となり、私の集落は携帯電話の電波が届かない地域なので、災害の報告などで大変困りました。

自治会や消防団の皆さんで被災地の仮復旧作業を行い、住民の安否確認と災害実情調査を行いました。国道寸断の間、病院や買い物に行けない住民のため、加茂郵便局の方

が薬や食料などを届けてくれて、郵便局の存在はとても価値がありました。

**菅野** 大浜地区は、人口約140人、世帯数は87あり、そのうち50人（世帯も同数）が「星の里」の利用者です。星の里での災害の始まりはまず電柱が倒れ、それから5分ぐらいで流木が施設に流れ込み、鉄筋コンクリートの施設がえん堤となつて、建物以外は全部流出しました。

私は市外にいたので施設へ電話をかけましたが、すべて不通。自宅に着いたときに水没という情報を得ました。そのときは、水没という意味が理解できませんでした。

施設ではグラウンドに全部水が入り込んでいた状態で、職員15人が対応して利用者全員を1カ所に集め、飯岡消防団の方の応援も得て利用者を救出していきました。それから避難先へ向かいましたが、土石流の影響で避難先が変わり、午後7時半に飯岡公民館へ全員無事に避難しました。被災した施設はヘドロが堆積し、金庫や冷蔵庫が水に浮いている状態。私はこの状況を見て、初めて水没という意味が理解できました。

そういう状況の中、ありがたいことに延べ2000名の方によるボランティア活動でヘドロの除去ができました。おかげさまで5カ月後には新しい施設に入り、みんな元気に生活をしています。

### コミュニティ防災

**ラジブ** 開発途上国は自分の町は自分で守る、自分の村は自分で守るという意識が強く、政府のできることは限られているので、自分が自分の命を守るということが第一と考えています。日本の防災は世界的にも先進国ですが、阪神・淡路大震災のときに、その防災技術が研究者と使用者の間でギャップ（隔たり）があったと思います。

大震災が教えてくれたことは、近所の人や近所の人を助けてくれたこと。初めの助け合いは近所の人たちです。消